

〔翻 訳〕

『ソネットのダーク・レディ(The Dark Lady of the Sonnets)』

バーナード・ショー
大江 麻里子 (訳)

〈訳者まえがき〉

イギリスでは、ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616) 没後300年を記念して国立劇場を建設しようという気運が高まり、基金を集めるための興業を行うことになった。バーナード・ショー(Bernard Shaw, 1856-1950)は、その運動に貢献するためにシェイクスピアの代表的詩集である『ソネット集』を題材に選んで1910年に短編戯曲を書いた。この詩集が有名なのは、そこに登場するダーク・レディが謎を秘めているからで、そのモデルが一体誰なのかを突き止めようと、多くの議論がなされてきた。それゆえこの戯曲は、ショーの愛好家だけでなく、シェイクスピアの愛好家や文学研究者たちの興味を大いにそそめるものである。この戯曲で謎が解き明かされるかどうかは別として、ショーの真意は国立劇場の必要性を効果的に訴えることにあったようだ。エリザベス女王やシェイクスピア自身も登場するこの戯曲は、イギリスにおいて上演回数の多さを誇る傑作喜劇である。シェイクスピアの名台詞のパロディが多く盛り込まれているので、それに気付くことが出来れば、さらに面白さを増すはずである。本文の後につけた註解を参考にして頂きたい。

この戯曲の翻訳は、1914年から1940年にかけて5つの翻訳が発表されているが、現在では日本語がやや古風に感じられることは否めない。そこで市川又彦訳と中川龍一訳を特に参考にしながら、現代の観客・読者に作品の魅力を存分

に伝えられるような翻訳を試みた次第である。

〈舞台設定〉

登場人物：衛士

男(ウィリアム・シェイクスピア)
外套を着た夫人(エリザベス女王)
黒婦人(ダーク・レディ)

時：1500年代から1600年代にうつる頃、真夏の夜。

場所：ホワイトホール王宮のテラス

〈戯曲〉

16世紀末。夏至の晩。テムズ河を見下ろすホワイトホール宮殿のテラス。宮殿の時計が15分毎のチャイムを4度鳴らし、11時を告げる。国王衛士が見張りをしている。外套を着た男が近づいてくる。

国王衛士： 生まれ。そこにいるのは誰だ？¹⁾
合言葉を言え？

男： おやおや！ダメだ。すっかり忘れちゃった。

衛士： ではここは通らせぬ。用事はなんだ？
何者だ？ 本当の人間なのか？

男： いいや違う、守衛さん。私は二日と同じ人間でいたことはありません。ある時はアダム²⁾、またある時はベンヴェーリオ³⁾、

そしてまたある時は亡霊さ⁴⁾。

衛士：（ひるんで）亡霊だと？ おお天使よ、慈悲の神々よ、どうかご加護を⁵⁾！

男： うん、いいねえ、守衛さん。もしよかったら、それもらっていいかな。物覚えがあんまりよくないんでね。（彼はメモ帳を取り出して、書きとめる。）こりゃ、いい場面になるな、あんたがたった一人で番をしてると、月明かりの中、私が亡霊のように近づいてくる。そんな変な目で見ないで、まあ聞いて下さいよ。今晚ここで、ダーク・レディと会うことになってるんですよ。彼女は、見張りを買収しといてくれるって話だ。そのためにちゃんと渡しておいたのだ。グローブ座のチケット4枚。

衛士： なんだとっ！ あの女、2枚しかくれなかったぞ。

男：（メモ帳を破りとって）まあま、このメモを見せたら、ウィル・シェイクスピアの芝居をやってる時ならいつでもタダで入れてもらえるから。奥さんも連れてきていいよ、友達も、守衛隊を全員連れてきたっていい。チケットはいくらでもある。

衛士： ああいう新しい風潮の芝居（「お気に召すまま」）はあんまり好きじゃないんだ。何言ってんのか全然分かんない。しかも台詞ばかり。それより『スペインの悲劇』⁶⁾のチケット、ないかな？

男： 『スペインの悲劇』が観たけりゃ、金があるな、相棒。ほれ、チケット代だ。（金貨を一枚渡す）

衛士：（圧倒されて）金貨だ！ああ旦那、あんたのダーク・レディよりよっぽど気前がいいや。

男： 女は金にシブいからねえ。

衛士： そうそう。たんまり持っている奴でも、きまって値切るんだ。あんたのレディだって、ほとんど毎日守衛に付け届けをしてきたんだからねえ。

男：（真っ青になって）そんなことは信じないぞ。

衛士： なあ、旦那。悪いことは言わねえ、こんな逢引はもう止めたほうがいい。

男： この悪党め、私のレディが会っているのは私だけじゃないと？ 他にも男がいるなんて。

衛士： 旦那もオクテだねえ、この世でイカした男は旦那だけじゃない。陽気でセクシーな女の子なら、仕方ないでしょう。今日のところは帰るな。生まれて初めて俺に金貨を触らせてくれた紳士が騙されるのを見過ごすわけにはいかねえ。

男： ありがとよ。バカだね、男は。女はみんな嘘つきだって分かっているはずなのにさ、この人だけとは思っていたら、やっぱり嘘つきだったと分かってショックを受けるなんてさ。

衛士： そんなことはないですよ、旦那。身持ちのいい女だって一杯いますよ。

男：（我慢できずに）いいや。みんな嘘つきだ。みんな。それを否定するなら、お前が嘘つきになるぞ。

衛士： 旦那は宮廷でのことを言ってるんでしょう。あそこじゃあ、ほんと、弱き者、汝の名は女⁷⁾ってかんじでしょうね。

男：（再びメモ帳をとりだして）頼むからもう一度言って、その弱き者とかっていうの、あの音楽的な響きを。

衛士： 音楽的な響きですって？ 私はミュージシャンじゃありませんってば。

男： 君の魂には音楽がある⁸⁾。君のような身分の者にだって、そういうものが備わっているんだ。（書いて）「弱き者、汝の名は女！」（愛情こめて繰り返す）「汝の名は女。」

衛士： でも、ねえ、こんな短い文に音楽ですか？ 旦那はこんなつまらないものを掠め取るコソ泥ですかい⁹⁾？

男：（熱心に）掠め取るコソ泥・・・（はっとして）ああ！不滅の文句だ！（書き留める）この男は私なんかよりもよっぽど才能があるな。

Oct. 2012

『ソネットのダーク・レディ (The Dark Lady of the Sonnets)』

衛士： 旦那は、私のご主人のペンブルック卿と同じご趣味のようですね。

男： おお、彼は私の親友だが。彼の趣味って？

衛士： 月明かりでソネットを作ることです。それも同じ女性のために。

男： そんな！

衛士： 昨日の晩、旦那と同じ用事で、同じ場所に立っておられました。

男： ブルータス、お前もか！¹⁰⁾ 私はお前を友人と思っていたのに。

衛士： そういうもんですよ。

男： そういうもんだ。そういうもんだった。(そっぽを向いて、打ちひしがれる) ヴェローナの二紳士だ！¹¹⁾ ユダ、裏切り者め！

衛士： そんなにひどいお方ですかね？

男： (慈悲心と自制心を取り戻して) ひどい？ いいや。私だって人間だ。人間はそういうもんだらう。子供だって腹が立ったら、相手を罵るだらうよ。そういうことだよ。

衛士： ああ、言葉、言葉、言葉ですな¹²⁾。風のせいかな。東から風が吹くと腹がふくれるって¹³⁾、聖書にも書いてある。といっても相手がニワトリじゃ無理だね¹⁴⁾。

男： 素晴らしい韻律だ。ちょっと失礼。(メモをとる)

衛士： 韻律ってなんのことです？ 聞いたことないなあ。

男： それこそ世界を支配するものだよ、君。

衛士： 面白い人だねえ。いや、悪い意味じゃないんです。こんな人は初めてだ、親切だし、紳士だし。私のような教養のない男でも、なんだか心魅かれます、なんていうか、もっと話を聞きたくなるっていうか。

男： それが私の仕事だからね。なのに世の中の奴らときたら、私の話なんかどうでもいいのさ。

宮殿のドアが中から開かれて、ランプの光がも

れてくる。

衛士： 旦那のいい人が来なすった。あっちの方へ行ってましよう。どうぞごゆっくり。そんなすぐには戻ってきませんから、私の部下が巡回してこない限りね。奴はやり手の隊長でね。容赦なくひっとらえるんです¹⁵⁾。おやすみなさい、ご幸運を！(去る)

男： 「容赦なくひっとらえる」！ 「やり手の隊長」！ (熟したプラムを味わうかのように) ううむ！ (メモをとる)

外套を着た貴婦人が宮殿から手探りで登場し、夢遊病のようにテラスをさまよい歩く。

貴婦人： (手を洗うようにこすりながら) 消えろ、忌々しいシミ¹⁶⁾。化粧をしても無駄なこと。神は一つの顔を与えたもうた、だが自分でそれを作り変えてしまった¹⁷⁾。女よ、死はすぐそこ。もはや美しさとも永遠の別れ。あらゆるアラビアの香水を用いてもこのテューダーの手を白くすることはできない¹⁸⁾。

男： 「あらゆるアラビアの香水」！ 「美しさとも永遠の別れ」！ 「美しさとも永遠の別れ」！ それだけで詩になっている。私のメアリーかい¹⁹⁾？ (貴婦人に) 声が変わだよ？ それに詩的なことなんか言ったことがないのに。ああ酔っ払ってるんだろ？ まるで幽霊のような歩き方だ。メアリー！メアリー！

貴婦人： (彼の言葉を繰り返し) メアリー！²⁰⁾メアリー！あんなにあの女から血が流れるなんて！²¹⁾ 血なまぐさい処分を顧問官たちがしたのは私のせいだとも！ええーい！もし殺したのが女なら、あんなに床を血まみれにしたりしなかったらうに。そんなに彼女の頭を持ち上げないで！髪はかつらだ。でももう一度言おう、メアリーは埋葬された、墓から出てくることはない²²⁾。あの女などこわくない。男たちの膝に坐っ

ておればいいものを王座に飛び乗ろうとするようなメス猫は、追い払われねば。やってしまったことは、仕方が無い²³⁾。消えよ²⁴⁾。ええーい！そばかす娘こそ女王なのだ！

男：（彼女の腕をゆすって）おい、メアリー、眠ってるのか？

貴婦人は目覚め、びっくりして、失神しそうになる。彼が彼女を腕で受け止める。

貴婦人： ここはどこ？ そなたは誰じゃ？

男： お許しを。ずっと人違いをしていました。あなたが、私のメアリーだと思ってたんです。私の恋人の。

貴婦人：（激怒して）なんと不埒な奴め。

男： どうかお怒りにならないでください。私の恋人は本当に美しい女です。でもあなたほど上手くは話さない。「あらゆるアラビアの香水」！よく言ったもんです。語呂もいいし、センスも素晴らしい。

貴婦人： ここで私はそなたと話をしていたのか？

男： ええ、そうですよ、お美しい方。お忘れですか？

貴婦人： 眠りながら歩いていたのだ。

男： 今日が初めてではなさそうですね。だが、あなたの言葉は蜜のようにかぐわしい。

貴婦人：（冷たい威厳をもって）誰にももの言っているのかわきまえよ。そんな生意気な表現は許さぬ。

男：（気にせずに）この程度のことで目クジラをたてなくてもいいでしょう。貴女はおそらく、身分ある貴婦人なのでしょう。でも私にとっては二種類の女性しかいません。ガーガーいう雌鳥。私に夢を見させてはくれません。そして、甘く低い素敵な声の女性。貴女の声はあらゆる美を備えた声。どうぞその音楽的な声を惜しまずもう少し聞かせてください。

貴婦人： よくも臆面もなく……。おだてれば、なびく私と思うなかれ……²⁵⁾

男：（手をあげて彼女をとどめる）「おだてれば、なびく私と思うなかれ……」

貴婦人： これ、私の前で物まねをするとは。

男： 音楽です。いい響きだ。いい音楽を聴いたら、もう一度唄ってみて憶えようとするでしょう？「おだてれば、なびく私と思うなかれ……」なんと！なびくという一語が、女心をうまく表している。なびく！（メモ帳をとりだして）なんだった？「お世辞では、なびく……」

貴婦人： 大間違いじゃ。「おだてれば……」と言ったの。

男：（急いで）おだてれば、そう、おだてれば、おだてれば、おだてれば。ほんと、物覚えが悪くて！書き留めないと忘れるんですよ。（書き始めるが、止まり、記憶がたぐれないでいる）あの、何が大間違いなんでしたっけ？貴女のおっしゃるとおり、耳できいた途端に、口が違う言葉を復唱したのです。

貴婦人： そなたは、「お世辞では」と言った。私は「おだてれば」と言ったのだ。

男：「おだてれば」（訂正する）よし！（熱心に）そして、お世辞でもおだてているのもなく、心から、私のものになってほしいのです。

貴婦人： なんだと！もしかして、私を口説いているのか、このワルめ。

男： いいえ、口説いているのは貴女のほうです。私はただ、貴女の足元で愛を捧げるのみ。これほどウィットに富んだ言葉を話す女性なら愛さずにいられない。ですから、お願いです、神のように完璧な貴女²⁶⁾、いや、これは前にどこかで言ったな、貴女への私の愛は新しい言葉で表現しなければ……

貴婦人： 話しすぎじゃ、よいか、私はくどくどと話されるよりも、話してきかすほうが

Oct. 2012

『ソネットのダーク・レディ (The Dark Lady of the Sonnets)』

慣れているのだ。

男： 話の上手い方は大体そういうものです。そう、貴女の言葉はまるで天使のよう。だが、言葉の王といえるのはこの私のほうなのです……

貴婦人： 王だと！ほう。

男： まあね、私達は所詮男と女に過ぎません……

貴婦人： 私を女とよぶのか？

男： それ以上に高貴な名前があるでしょうか？ だからこそ私は、あなたを愛するのです。それなのに、ただの女であることに満足できないとおっしゃるのでしょうか？ しかし、その真実に私達を救うことの出来るパワーがあるのです。

貴婦人： お説教は結構。それなら私のほうがお手のものだ。

男： これは説教ではなく、活きた真実なんです。不朽の詩にはパワーがあるのです。穢れた世界で取るに足らない人間が生きるには、世界を言葉によってミステリアスに飾り立て、人間の姿を変えさせ、魂を高揚させるしかないのです。そうすればここは至上の楽園になるのです。

貴婦人： そなたのおしゃべりは楽園ですら、大なしにしてしまう。大ボラを吹くのはそのへんでやめておくがよい。

男： あなたの話し方は、ベン²⁷⁾ に似ています。

貴婦人： ベンとは？

男： 頭のいいレンガ職人です。階段を一段ずつ上がってこそ頂点に達すると考えてるものだから、私がひとつとびにトップに躍り出たのが気に入らないのです。私に言わせてもらえば、言葉というものの素晴らしい魔力を大胆かつ壮大に表現したような言葉もその音楽もいまだに作り出されてはいないのです。言葉の力を否定することこそ異端です。はじめに言葉あり、と教えられたでしょう？ 言葉は神と共にありと？ いや、言葉は神なりきと？²⁸⁾

貴婦人： お黙りなさい。聖なるものについてべらべら喋り散らすとは。教会の長は女王なのですよ。

男： 貴女が初めて私に口を聞いてくださったときのようであれば、貴女こそ私の教会の長ですよ。「あらゆるアラビアの香り」！女王がこんな風に話せるのでしょうか？ ヴァージナルを弾くのがお上手とはききますが……。もし私に弾いてくれるなら、女王の手にキスをしましょう。でも、それまでは貴方こそが私の女王。私の心に音楽を奏でて下さったその唇にキスを。(彼女の腕をとろうとする。)

貴婦人： なんとという無礼者！ 手をお放し。

黒婦人が、二人の背後のテラスに隠れるようにして、つま先だっちょこちょこと走りこんでくる。二人が何をしているのか判明したところで、怒ってすっくと立ち上がり、嫉妬深く聞き耳をたてる。

男： (黒婦人には気付かない) それでは、あなたから流れ出る生命力で私の手を震えさせるのをお止め下さい。まるで北極星が金属をひきつけるように、私は貴女から離れることが出来ないのです。もう駄目です。二人を引き離せるものなど何もない。

黒婦人： あら、そうかしら、この大嘘つき野郎とこの薄汚い売春婦。(激しく平手打ちをして、二人を引き離す。男のほうは運の悪いことに、右手のパンチをくらって、敷石の上に大の字に倒される。) これでもくられ、二人とも！

外套を着た貴婦人： (怒りがこみ上げて外套を脱ぐと、身分の高い者としての怒りを露わにする。) 大逆罪じゃ！

黒婦人： (彼女の正体を知って、ひざまずき、恐れおののく。) ウィル、私もう終りよ。女王様を殴っちゃった。

男： (無様な倒れた状態から威厳を取り戻して身を起し) 女よ。お前は、このウィリア

ム・シェイクスピアを殴ったのだぞ!!!!!!
エリザベス女王：（仰天して）おお、なんてこと!!! あのウィリアム・シェイクスピアを殴ったのかい！ だが一体なぜ、私の宮殿で尻軽女と一夜の逢引きをしているやくざ男が、ウィリアム・シェイクスピアなのだ！

黒婦人： 女王様、彼は遊び人なんです。ああ、私の手を切落として下さい。

エリザベス女王： 好きにするがよい。だが、何なら首を切り落としてもよいぞよ。

黒婦人： ウィル、たすけて。私を救って。

エリザベス女王： 救うだと！ この女王の命令から、こんな奴に救えるものかね！ この者はせいぜい郷士の身分であろう。最も出来の悪い女官であっても、私の宮廷をこんな生まれの卑しい下郎などと、いちやついて汚して欲しくはなかったぞよ。

シェイクスピア：（憤慨して立ち上がり）「生まれの卑しい」ですと！ このストラットフォードのシェイクスピア家のことを！ 母親はあのアーデン家ですぞ！ お口が過ぎますぞ。

エリザベス：（怒り狂って）血筋のことをいっているのじゃ！ 分からせてやろうぞ……。

黒婦人：（立ち上がって、二人の間に割って入る）ウィル、お願いだから、これ以上女王様を怒らせないで。死罪になるわよ。どうか、この者の言葉は無視して下さい。

シェイクスピア： メアリー、たとえ貴女の命を救うためであっても、自分の命のためでも、私の家のことを悪くいう王族にへつらうわけにはいかん。父が貧乏の末に破産したのは否定しません。でも、そうなったのは、父の血筋があまりにも貴く、商売をするには気前が良すぎたからです。自分の借金を否認したことはありません。それを支払わなかったのは事実ですが、ちゃんと手形は渡したということは隠れも無い真実です。その手形が心根の卑しい行商人の手に渡り、それで不名誉な結果に終わったので

す。

エリザベス：（威嚇するように）そんなご立派な父親の息子なら、ヘンリー8世の娘の前では分をわきまえることくらい分かるはず。

シェイクスピア：（感情を抑えきれず、これ以上ないほどの威厳をもって）そんな変人をストラットフォードの最も名誉ある市参事会員と並べないでいただきたい。ジョン・シェイクスピアは結婚は一度だけ。ハリー・テューダーは六回も結婚した。あんな男の名前を口にすることで恥ずかしいですよ。

黒婦人：（同時に叫ぶ）ウィル、頼むから……

エリザベス： この無礼者……

シェイクスピア：（二人をさえぎって）大体、ハリー王が貴女の本当の父親かどうか？

エリザベス：（黒婦人と同時にしゃべる）この！ どうしてくれよう（怒りで歯ぎしりをする）

黒婦人： 女王様は私を市中で百叩きになさるわよ。ああ！ やめて！

シェイクスピア： ご自分こそ、分をわきまえられよ。私は間違いなく両親の子供、誠実なる紳士。家紋さえちゃんと申請してありますよ、合法的にね。貴女もご自分の素性をこれほどはっきりおっしゃれますか？

エリザベス：（ほとんど我を忘れて）あと一言でもしゃべったら、首をしめてやる。

シェイクスピア： 貴女様は正当なテューダーではありません。ここにいるあばずれだって、同じように王座に座る権利があるんです。なぜイギリスの王位にいられるとお思いか？ かの有名な頭の良さ？ キリスト教国のどれほど悪賢い政治家だとして、あなたの賢さにはかなわないから？ いいや。自然の気まぐれですよ、どんな羊飼いの娘にだっておこるかもしれない偶然、それが貴女をこの時代の最も素晴らしく美しいお方としたのです。（エリザベスは拳を振り上げ、彼を殴ろうとしたところで、腕をお

ろす。)だからこそあらゆる男達が貴女の前にひれ伏し、あなたの誇り高い心ゆえに、揺るぎない王位を差し出し、この欲望うずまく海に浮かぶ強大な島国を委ねたのです。以上が、私の嘘偽りのない感想です、女王様。さあ、ご処分はいかようにも。

エリザベス：(威厳をもって)シェイクスピア殿、私が情け深い君主だったことに感謝するのだな。そなたの粗野な愚かさも見逃してやろう。でも、これだけは憶えておくがよい。この世の中には、真実であっても、口に出してはいけないこともあるのだぞ、特に乙女にはな。(女王にとはいわぬ、今は一人の人間として言っているのだ。)

シェイクスピア：(ぶっきらぼうに)あなたがまだ乙女なのは、私のせいではありませんよ、もちろんもったいないとは思いますが。

黒婦人：(再び怖れて)お願いします、もうこの者とは口をきかないで下さい。あの口でみだらな冗談だって言うのですから。私をどう扱ったかご覧になったでしょう！私のことをあばずれだとかなんとか、女王様の前で言うなんて。

エリザベス：そうじゃ、そちにも尋ねておきたい。こんな時間にここで一体何をしていたのじゃ？それに嫉妬心かられて自分の主人を殴っておいて、その懇願の仕方は一体どういうことじゃ？

黒婦人：女王様、私は生きてまっとうな人生を送りたいのです……

シェイクスピア：(皮肉をこめて)ふん！

黒婦人：(怒って)そうよ、私だって、あなたみたいに助かりたいのよ。黒魔術や、言葉や韻文以外は信じていないような人みたいにね。実を申しますと、私はこの男と永遠に手を切るためにここにやって来たのです。こんな男とつきあうのがどれほど辛い。すごい大物かと思えば、ちんけな男にもなる。魂の底まで見透かして心をひきつ

けるかと思えば、ひどい侮辱をして心から血を流させる。そしてまた、どんな女でも拒めないようなお世辞でその傷を癒してしまふのです。

シェイクスピア：お世辞だって！（ひざまづいて）陛下のご判断に委ねたいと思います。私は真実を告白したのです。確かに口は悪いし、行儀作法もなっていない、神の定めた女王すら冒瀆してしまった私です。でも、陛下、私はお世辞など申しませんでしたでしょうか？

エリザベス：無罪放免としてやろう。そなたはなかなか気の利いたやり手のようじゃな。(彼は、有難く立ち上がる。)

黒婦人：女王様、この人の口車にのせられておいでです。

エリザベス：(瞳の中に激しい光)何と！
そうだったのか？

シェイクスピア：女王様、彼女は嫉妬しているのです、だからそんなことを言うのです。そんなはずないでしょう。貴女はご自分を情け深い君主だとおっしゃった。でも、私がここで初めてお会いしたときに、王族の身分を隠されたことは、なんと残酷なことか。真の偉大さを備えた本当の美しさを見てしまった今となっては、この黒髪で、黒い瞳の腹黒い女では、もう満足できなくなっていました。

黒婦人：(傷つき、失望して)この人は10回以上も私に誓ったのですよ。ブロンドの髪の女よりも、黒髪の女のほうが、どんなに醜かろうとも、きっとイギリスで大切にされる時が来るだろうと²⁹⁾。(シェイクスピアをなじるように)あんた、そう言ったでしよ、違う？この人ったら、インチキとウソばかり。気分次第で、天国まで持ち上げたり、地獄に引きずり落とされたりするのはもう真っ平。私の父なら、私のあぶみを支えるのにもふさわしくないと思うような男を愛してしまうなんて、自分が情けない。私のことを世界中に言いふらすし、

ほら、私との恋愛や恥ずかしいことまで劇に書いてしまって、劇場で赤面したわよ。それに、ちゃんとした男なら書かないようなことまでソネットに書いてしまって。私、もう変になりそう。自分でも何を言ってるのか分からなくなってきました、女王様。こんなひどくみじめな扱いを受けた女があるかしら……³⁰⁾

シェイクスピア： おお！ 悲しみのおかげで、君にも音楽的な言葉がしゃべれるようになったね。「こんなひどくみじめな扱いを受けた女があるかしら。」(この台詞を書き留める)

黒婦人： 女王様、失礼させていただいてもよろしいでしょうか。悲しみと恥ずかしさで取り乱しておりますので……。

エリザベス： 行くがよい。(黒婦人が女王の手にキスをしようとする) もうよい。行け。(黒婦人は、身もだえしながら去っていく) あれほど情け深い女に、そなたあまりにも残酷ではないか、シェイクスピア殿。

シェイクスピア： 残酷ということはありません。ギリシャの神々でもそうしたでしょう³¹⁾。女王様と彼女の差はあまりにも歴然としていたのですから。

エリザベス： あまりに自惚れた口をきいてばかりいると、こちらも気分を害することもあるのだぞ。

シェイクスピア： ああ、そこをあえて一介の詩人として申し上げさせて頂きたいのですが、私のインスピレーションが大したことがないというなら、奇跡のように素晴らしいあなた様の統治能力さえ大したものでもなくなってしまう。私の書いた言葉にこんながあります。「君主達の大理石や金メッキで造った記念碑は永遠なり³²⁾」。このような言葉で、私は世界を素晴らしくも馬鹿げたものにも自由自在に出来るのです。それに、この私になら、特別な恩恵を与えてくださってもよろしいかと。

エリザベス： 恩恵が欲しいのなら、処女の女王の気分を害させることなく願うがよい。大体、凶々しい。そなた位の身分で、もちろんそなたの市参事会員であった父上を悪く言うつもりはないが、身の程をわきまえるべきであろう。

シェイクスピア： ああ、女王様、身の程はわきまえます。ですが、お願いです、どうか女王でも処女でもなく、一人の女として聞いてくれませんか。稲光がバンクサイド³³⁾へと河を渡るくらいのほんのちょっとの間だけでいいのです。だってあなた様は、私にとっても、スペインのフェリペ王でさえ、そしてどんな男でさえ手の届かないような女王様なのですから、可能な限り私はお行儀をよくして、私の身分を忘れていただく恩恵を願いたいのです。

エリザベス： もう地位を上げて欲しいと申すか！ そなたも他の宮廷人と同じじゃ。栄達はのぞめぬ。

シェイクスピア： 「栄達はのぞめぬ³⁴⁾」。ちょっと失礼して、女王のお言葉を。(書きとめようとする)

エリザベス： (彼の手からノートを叩き落す) いらいらするノートめ。そなたの劇のために話しておるのではないぞ。

シェイクスピア： いえいえ、あなた様が全てインスピレーションを下さるのです。なんといっても、女王様を褒め称える他に何の目的があるでしょう。でも私が最もお願いしたい恩恵というのは、大きな劇場なのです。あえて学問的な名前で呼ぶとすれば、国立劇場とでもいうべきものを、あなた様の臣下を教え導くために建設させていただきたいのです。

エリザベス： 何を言うのか？ 劇場なら、バンクサイドやブラックフライアーズがもうあるではないか？

シェイクスピア： 陛下、あれらは心根の卑しい者達の娯楽場にすぎません。彼らは自分達が観たい、馬鹿げた類のものばかりを

求めます。自分たちが教養を身につけ、もっと進歩するためのものではないのです。教会がその良い例でしょう。教会に入るのに入場料はいりませんが、信者が押し寄せるように工夫をこらしているでしょう。劇場の場合は、殺人や陰謀、ペチコートを来た娘役、それにちょっとエッチなストーリー、こういうのがないと、良い役者に払う賃金や美しい衣装代を払ってくれないんですよ。苦しい経営なんです。そうそう、一度気品のある素晴らしい2本の芝居を書いたことがあるんですよ。陛下のように素晴らしい品格と才覚をもった女性たちが活躍する劇です。一本は、腕の立つ医者³⁵⁾でもう一本は、立派な仕事に身を捧げた娘³⁶⁾です。でも、全く馬鹿げた二つの淫らな本から芝居を書いたこともあります。一つは、女が男装して田舎者に軽々しい恋をして、その男は格闘で相手を投げ飛ばして土間の客たちを喜ばせたものです³⁷⁾。もう一つは、似たような女が紳士に向かって臆面もなく馬鹿げたことを言い続けるというもの³⁸⁾。これらは私の友人の金欠を助けるために書いたんですが、自分ではこんなのはもう御免なんです。芝居のタイトルは、私の気には召さないのに『お気に召すまま』と、『から騒ぎ』。そうしたら、こっちの気に入らない方の二本のせいで、劇場から品のいい人達を遠のかせてしまい、私の生み出した女医さんについての芝居はすっかり上演されなくなってしまいました。大衆には、彼女はお高みえるんでしょうな。だから陛下にお願い申し上げたいのは、商人たちが手を出さないような私の芝居を上演できるように、税収入から基金を寄付して劇場を建てるように命じていただきたいのです。質の良い芝居が、悪い芝居よりも得るものが大きいということを示したいのです。それから、陛下の王国のためにならないような輩にくだらな仕事みたいに、芝居を書くのを任せていないで、

ぜひちゃんとした人々にも書くのを奨励していただきたいのです。この芝居を書くという作業は大した仕事でして、人々の心や性質に大きな影響を及ぼすのです。観客が舞台を観て帰ると、すぐにそれを実生活、つまり、より大きな舞台でも真似するので。かつてはご存知のように、教会は人々を聖書劇で教えていました。でも大衆ときたら、迷信に満ちた奇跡や、血なまぐさい殉教をみるためにしか集まりません。それゆえ教会は、陛下のお父上の政策によって難局に直面し、演劇という芸術を認めず見捨ててしまったのです。そういうわけで、演劇は貧しい俳優や強欲な商人の手に委ねられ、奴らは陛下の王国の偉大さを称えるよりも、自分の懐具合しかみないのです。ですから、どうか陛下、教会が見捨ててしまった偉大な仕事を再開して、もとの威厳ある立派な芸術として復興していただきたいのです。

エリザベス： シェイクスピア殿、その件については、大蔵卿に話しておこう。

シェイクスピア： それではダメなのです。と申しますのは、大蔵卿は戦争が自分の甥の給料のため以外には、1ペニーだって、政府の必要経費からはだしてくれることはないのです。

エリザベス： シェイクスピア殿。その通りかもしれない。だが、私にはどうすることも出来ぬ。劇場のような猥雑な場所に国費を投じて口やかましいピューリタンどもを怒らせるわけにはいかぬ。それにこのロンドンには私がしなければならぬことが山ほどあるのじゃ、そなたの詩のために公の費用を使う前にな。よいかウィリアム、あと三百年以上もすれば、私の民も、人はパンによってのみ生きるにあらず、神が才能を与えた者から発せられる言葉も必要だということを知っているであろう。その頃には、そなたも私も土に還っているであろう。その上を馬が走っておるかもな。もしその頃も馬

が走っていて、人が空を飛んだりせず、馬に乗っておればじゃが。それにその時には、そなたの作品も土に還っておるかもな。

シェイクスピア： 私の作品は生き残ります。ご心配なく。

エリザベス： まあ見ものじゃな。でもこれだけは言える、私は自分の国民をよく知っておるからな。すべてのキリスト教国、野蛮なロシアや、野暮で田舎者のドイツまでもが国費で劇場を建てるまでは、イギリスが着手するようなことはなからう。そんな時がくれば、流行に遅れたくないがために、他の国の様子をみながら、控えめに義務的に着手するであろう。とりあえずは、そなたは自分では嫌だろうが、国民たちがそなたの最高傑作だと称するであろう二本の芝居を上演しておくしかあるまい。でも、これだけは言うておこう。もし私が子孫達に時を超えて話しかけられるなら、そなたの望みを叶えてやるように心から推薦してやろう。スコットランドの吟遊詩人はよく言ったものだ。「国を称える歌をつくる者は、法律をつくる者よりも力強い」とな。それと同じことは、芝居や幕間劇にもいえるだろう。(時計が15分をつける。衛兵が巡回から戻ってくる) さてと、処女女王は寝る時間じゃ。こんな無作法な臣下と話している場合ではない。これ！今夜、女王の部屋の見張りをするのは誰じゃ？

衛士： 私でございます。それでよろしければ。

エリザベス： これからはもっとしっかり見張るのじゃ。そなたは王族の寝室に続くドアの中へとんでもない危険な遊び人を入れてしまった。この者を連れ出すように。そして、ちゃんと追いついたら声をかけるように。王宮の門に鍵がかけられるまで、着替えもできぬ。

シェイクスピア： (女王の手にキスして) 私の身体は夜の闇に去って行きますが、私の

心は陛下についてまいります。

エリザベス： なんと！ ベッドの中までか？
シェイクスピア： いえ陛下。祈りの中に入ります。私の劇場のことを忘れないでいただくために。

エリザベス： それは私の子孫への祈りじゃ。自分でも神に祈るがよい。では、お休み、ウィル。

シェイクスピア： お休みなさいませ、エリザベス女王様。神よ、女王をお守り下さい！

エリザベス： アーメン。

別々に退場。彼女は寝室へ。彼は衛兵に伴われて、ブラックフライアーズに最も近い門のほうへ。

エイヨット・セント・ロレンスにて執筆
1910年6月20日

注

- 1) 『ハムレット』第一幕第一場 “Stand, Who goes there?”
- 2) 『お気に召すまま』の老僕、以下いずれもシェイクスピアが俳優として演じた役といわれている。
- 3) 『ロミオとジュリエット』のロミオの友人の一人
- 4) 『ハムレット』の父親の亡霊
- 5) 『ハムレット』第一幕第四場 “Angels and Ministers of Grace defend us!”
- 6) 1589年に上演されたトマス・キッドの人気をよんだ劇
- 7) 『ハムレット』第一幕第二場 “Frailty, thy name is woman!”
- 8) 『ヴェニス商人』第五幕第一場
- 9) 『冬物語』第四幕第三場
- 10) 『ジュリアス・シーザー』第三幕第一場
- 11) 『ヴェローナの二紳士』恋人がいるのに、友人の恋人を好きになって裏切る話。
- 12) 『ハムレット』第二幕第二場
- 13) 『聖書』ヨブ記第十五章第二節 “We fill our bellies with the east wind...”
- 14) 『ハムレット』第三幕第二場
- 15) 『ハムレット』第五幕第二場
- 16) 『マクベス』第五幕第一場
- 17) 『ハムレット』第三幕第一場
- 18) 『マクベス』第五幕第一場
- 19) シェイクスピアの愛人であるメアリー・フィッ

Oct. 2012

『ソネットのダーク・レディ (*The Dark Lady of the Sonnets*)』

トン

- 20) メアリー・スチュアートを指す。
- 21) 『マクベス』 第五幕第一場
- 22) 『マクベス』 第五幕第一場
- 23) 『マクベス』 第五幕第一場
- 24) 『マクベス』 第五幕第一場
- 25) 『ハムレット』 第一幕第二場
- 26) 『リチャード三世』 第一幕第二場
- 27) ベン・ジョンソンのこと。
- 28) 『聖書』 ヨハネによる福音書第一章第一節 “In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God.”
- 29) ソネット第百二十七章
- 30) 『ハムレット』 第三幕第一場
- 31) ジュピターとセミリの物語。
- 32) 『ソネット』 第五十五章
- 33) ロンドンの劇場街。
- 34) 『ハムレット』 第三幕第二場
- 35) 『終わりよければすべてよし』 ヘレナ
- 36) 『尺には尺を』 クラウディオとイザベラ
- 37) 『お気に召すまま』 ロザリンドとオーランドのこと。
- 38) 『から騒ぎ』 ベアトリスとベネディックのこと。

参考文献

- 市川又彦 「ソネットの黒婦人」『バナード・ショウ 一幕物全集』 東京：新潮社, 1922年。
中川龍一 「ソネットの黒婦人」『悪魔の弟子』 世界文庫 東京：弘文堂, 1940年。

(2012年7月13日掲載決定)